

鳴き子の郷

068 仙台第一高等学校

進学のために上京してからもう十年も経った。長らく見ていなかった故郷の雪景色は、電車の窓ガラスの向こう側だ。改札を抜けて外に出れば硫黄の香が混じった冷たい風が鼻を通り抜ける。

私は真っ先に、小学生の頃によく来ていた小さな足湯に足を運んだ。寒さで冷えたつま先を温めようと浸かると、柔らかくさらりとした湯が肌を撫ぜる。その感触が心地良く、じわりと疲れが溶けていく。

帰り道にある温泉街に入ると、懐かしい情景が目に入る。友達と訪れた食堂のおばあちゃんは元気に接客をしている。温泉旅館の看板も残っていて、こけし屋のじいちゃんも店の中から手を振っている。青春を過ごしたこの街はまだその面影を残し、まるで私の帰郷を待っていていたかのような感じがした。現今ではほとんど見なくなってしまったこの温かさがこの先も変わらぬことを願いながら足を進め、私は見慣れた玄関をガラリと開ける。

「母さん、父さん、ただいま！」



旅する人
江戸川乱歩賞
2026 出展作品